
ボクの彼女は召喚獣！？

柴わんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクの彼女は召喚獣！？

【Nコード】

N7939J

【作者名】

柴わんこ

【あらすじ】

楽しい学園生活が待っているはずだった

なんか急に「はいアレやりますよー」とか言われ

渡されたのは・・・召喚石！？そして中にはやっぱりアレがいた・・・

第1話 プロローグ的なもの(前書き)

この作品は面白くなく、つまらない恐れがあります

召還獣とか書いてありますがこれはあくまでOPなので

「出てきてねえじゃねえか!」とか言われても困ります。

では、お楽しみください (^ | ^ .)

第1話 プロローグ的なもの

春の季節

卒業シーズン

そして入学シーズン

ぽかぽかと春の暖かさが感じられる

そんな中俺は、新たな扉を開けようとしていた

しばさきあきひと
柴崎秋人は今日から

新しい人生を迎えようとしていた

「今日から学園生活だ」

高まる気持ちを抑えつつ歩き続ける

「校門かあいよいよって感じだな、ちよつと緊張してきたかも」

この時俺は、まさか戦って戦うような学園生活を送るとは思っても見なかっただろうな

教室に入り、用意されている机を探し・・・見つけた

「はぁーあ、なんか女子が座ってるんですけど」

迷惑極まりないなこれ・・・仕方ないどこかで空くの待つとしようにしてもこれが俺のクラスかぁ、こんなにいると、かわいい子がいるのかと思っただけど

期待もむなしく・・・そんな美人はいなくちよつと軽く落ち込んでしまった

まだ俺の席は空かず、仕方なく教室の後ろへと移動、そこには数人の男子がいて

軽く輪の中に入ろうとしてみる・・・が 「たん萌え」とか
「ツンデレって最強じゃない？」とか耳に入ってきて

俺の足が自然とそのまま彼らをスルーしていく

いかんいかん危ない、危うく引き込まれるところだった・・・！！

オタクなんてごめんだぞ

くそーだれか話を通じる奴はいないのか

もう一度周りを見渡してみると何人かで集まってキャツキャ言ってる女子（俺の席で）

数人で集まりゲームの話をし始める男子なんかもいた

みんな誰かと集まって自己紹介なり趣味なり好きな曲などを紹介して自分と趣味が合うような奴を見つけようとしている

・・・ん？なんかものすごい速さで足音が近づいているような・・・その予感は的中していた

!!!!!!!!!!!!!!!!ガッシャーン!!!!!!!!!!!!!!!!

と、大きな音を立て教室のドアが割れた

そして・・・誰かが転がってきた・・・

そのあとから少し背の低い女の子が現れた

「あんたがいけないんでしょうが!!!!」

「ああ?!俺のせいだったんのか!?!」

ついでに喧嘩しているようだ

それはどうでもいいから割れたガラスを気にしてもらいたい刺さったらどうするつもりだよ・・・

つてこの子めっちゃかわいいじゃん、なんだよーいるじゃんかわいい子

んでもう一人はなんか腕章つけてた・・・風紀委員?

ああやっぱ風紀委員だ、風紀委員って書いてあるじゃんつてかここから退かないと俺巻き込まれるんじゃない・・・

「だいたいあんたがあいさつなんかしてるから・・・!」

「つてそれは風紀委員の仕事だから仕方ねえじゃねえか」

「うるさい!言い訳は聞かない!」

こっちがうるさいよ、かわいいから許すけど

「ちよっとキミも言っちゃってよ」

「えっ俺？」

「そうよ、あのねこいつがあたしのね……」

ああついに巻き込まれた……かわいいから許すんだけどね

「あたしの……!!!!」

急に顔が赤くなっていき、そして

「あたしのパンツを見たのよー!!!!」

と赤くなりながらもそう言った

おお、すごいBIGボイスだ……ってパンツを見たのかこいつ
いや、正しくはパンツを見てしまった？いやどちらにせよ結局見て
んじゃねえか

ん？あれ？急にこいつが妬ましくなってきた

「おいっ！だからそれは誤解だっつて」

「ねえお願い助けて」

彼女が腕に抱きついてくる、ちょっとうれしいかも

「おい、お前こいつが言ってることは嘘だからな」

え？嘘なの!?!

「嘘なんですか？」

男を見て、彼女を見た

「嘘じゃないよ？あたしのこと信じて」

と、上目遣いで言ってきた、同時にさっきのオタクどもが

うらやましいなーボクにもしてほしいなーとか言ってるのが聞こえる

信じて……か、まあかわいいから信じるんだけどね

「心配しないで、俺アンタのこと信じるよ」

ニコッ、となれない笑顔を作ってみた

「おい、もしかして俺がパンツを見たっけ思ってるんじゃない……」

とか言ってきた、答えはこうだ

「見たんでしょう？っつか彼女が言ってるじゃないですか「見た」
っつて」

腕の中で彼女が「うんうん、そうだそうだ」と付け加えた

「だから、俺は見えてないんだって」

「まーた言ってるよこの人、もうあきらめるよ、勝負はついてるんだぜ？」

もう一度言っつてやろうと思ったけど、そろそろかわいそうだと思い、止めておいた

ところ代わりここは生徒会室

「え？もうトラブル起きたの？」

「そしてみたいですよーすいませんねえ会長」

「まあ気にしてないんだけどねー」

「いやいや、少しは気にしてくださいよ」

「ん？そう？・・・話し変わるけどいい？」

「変えるの早くないですか？まあ別にたいしたことじゃないからいいんですけどね、で、何ですか？」

「早速来週からアレやるからそのつもりで」

「え？アレ？・・・アレってまさか・・・！！！！」

第1話 プロローグ的なもの（後書き）

はじめまして柴わんこと申します

まずはじめに「面白かったですか？」とだけ言わせてください（笑

こういっちゃんなんですけど・・・この先どうなるか考えてません

まあそういうわけで）どういうわけだよ

こちら入んで退かせてもらいます

召喚獣きました(前書き)

楽しく読んでもらえるとう幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

召喚獣きました

「そういえば気になってたんですが」

この石って悪用されたらマズインじゃ・・・

「ん？何？」

「その石を誰にあげるのかってどうやって決めているんですか？」
気になる、こんな危険で貴重なもの誰にあげるのかどうやって決めているんだろうか？

「ん？なんだそんなこと？」

いやいや、こちららそんなことじゃ済まない気がするんですけどねえ
「くじ引きだよ、く・じ・引・き」

「えっ！くじ引きで決めているんですか？！」

生徒会の一員になって約1年、知らないことはだいたい無いと思っ
ていた

しかし、まさか・・・くじ引きで決めていたなんて・・・くそ俺も
欲しかった・・・

「そういや、君は石を貰えてなかったんだっけ？」

ん？なんだこれは・・・もしかして貰える可能性が出てきたりして
・・・

「はい、そうなんですよ僕らの時代は先生が渡していましたから
「欲しい？」

キター！！もらえる？！マジ！？

「えっ！？くれるんですか？！」

「あついや・・・ただ欲しい？って聞いたただけなんだけど・・・」
ハメられた・・・こいつ・・・立場的に上とは言えコレだけは言
いたい・・・ちくしょー！！

一方柴崎秋人はと言うと

「ねえ、キミの名前まだ聞いてないよね」

「え？・・・ああうん」

俺は今さつき揉め事を起こしていた1人の彼女と話をしている

「まず、あたしから言つのがマナーかな？」

と、少し照れながらに言つたその顔は、見るだけで「よし！今日登校するわ！」

とでも言い出しそうなくらい価値のあるものだ と確信した

「あたしの名前はね、九条沙織くじょうさおりよろしくね」

少しだけ首を傾げる動作が反則級の威力を持っていることを感じた

「えっと、俺の名前は柴崎秋人しばさきあきひとって言います、よろしく」

軽くお辞儀をしておいた、すると

「もう、かしこまらなくていいんだよ？」

「いやあ、お辞儀くらいはいいんじゃないかね？」

「そうかなー？」

「そうだよー」

少しの間があいたとき、自然と笑いがこぼれてきた

「あはは、なんか面白い」

「そうだね、夫婦みたいだよー」

と、冗談で言ってるのは分かっても

是非、お嫁に来てもらいたい、と言つ気持ちちがこみ上げてきた

そして授業の始まりを告げるチャイムが鳴った

ああーもうちよい話がしたかったんだけど・・・まあ仕方ないか

おっドア越しに見える人影は先生か？

するとその先生はコンコンとノックをするとガラガラと音を立て入ってきた

「キーンコーンカーンコーン 授業ですよー」

つて何で先生がチャイムの音を復唱するんだ？

そして身長が小さい！ものすごく小さい！

もはやこれは小学生並だぞ

こんな子が道端を歩いていたら・・・ああ恐ろしい！犯罪だ！

本当に歳を取ってるんだらうか？

途中で「誕生日が消滅し、年齢がストップしましたー的なことじゃないだろうなおい」

と、こんな風に脳内で突っ込みを入れたところで

授業が始まった

「今日は初めての授業なので自己紹介からしましょう」

うわ、マジかよ自己紹介とか恥ずかしいな

「1番の人から名前と、好きな　を紹介してください、ではお手本がてら

先生から自己紹介を始めます、その後1番さんから始めますよ」

「先生の名前は、小川優つていいいます、好きな弁当は鮭の弁当ですよろしくね」

先生の紹介が終わると、今度は生徒の番で、一番から順に自己紹介が始まった

のところが考えなきゃなーとか考えてると、いつの間にか自分の順番が来ていた

「おーい、秋人君順番きてるよー」と、沙織さんが小声で告げてくれた

「柴崎秋人です、えーと……」

言葉に詰まってしまった……これはマズイ、どうしようやべえ……

「もしかして困ってる?」

と、先生が言うそして「じゃあこっちから聞こうかな?」

と、続けてきた、ああ救いの手が差し伸べられた気がする

「じゃあ柴崎君の好きな女子のタイプは?!!」

え……ああなんだ笑うとこなのかな?

その質問に答えようとしたその時

ものすごい視線が襲ってきた

沙織さんがじいーと言わんばかりにこちらを見ている

思わず緊張が走る

もしかしたらこの返答自体で、ある意味これからの
学園生活が決まってしまうかもしれないのだ

ボクは、「ははは」と笑いながら答えた

「えっと俺の好きな女子のタイプは」

このとき、教室中の女子がこちらを見ていることに気づいた

「まず1つ、髪が長く、優しい性格の人」

少し教室がざわざわし始めた

なぜか女子が髪の毛を気にし始めたのだ

やっぱこういうことを言っていると気になるのだろうか

沙織さんに関してはどうんどう、とうなずくだけ

何に対してのうなずきなんだろう？

「2つめは、料理が上手なこと」

なんか「ああーうち料理ムリ」とか「料理かぁ・・・」だとか

「料理練習しようかな」等をつぶやくのが耳に聞こえた

そして沙織さんは・・・うなだれていた

「あたし・・・料理できない」

うわぁ気にしてる・・・

「そして最後の3つ目」

すると先生が前のめりになりつつ

「3つ目はなんだあ〜？」

と言って来きた、正直予想してなかった事態に少し笑ってしまった
さりげなく顎が机の角に当たってるのを見たら笑えてしかたが無い

「3つ目は、裏が無い人です」

「裏？」

「はい、猫をかぶる人は・・・大っ嫌いです！」

と、俺はまた慣れない笑顔を浮かべ言った

すると、教室がざわめいた

「やっぱかぁー猫かぶるやつキモイよねー」

「だよーうちの知り合いにもそういう奴がいてさー・・・」

「はい、お疲れ様でしたじゃあ次の人お願いしま〜す」

と、若干顎が赤くなってる先生が言ったので俺は座った

「はい、では自己紹介が終わったので学校から入学祝の景品を渡します」

と言うと皆が「おおーすげー」や「なんだなんだ？」とか言うのが聞こえた

そして先生は続けた

「でも、数に限りがあるので誰に渡すかはこちらで決めます」

するとまあ予想はできていた教室中から「ええーそれはないよー」

「だよねー全員にあげようよー」などと批判の声が上がった

でも、ある生徒がこう言った

「全員に配れないほどの貴重な、あるいは・・・高価なものなんじゃないか？」

ああそつかだから全員分は無いのか・・・って何を渡すつもりだ？！

「ピンポン そうなんです、これは結構貴重なものなんです」

マジか！一体何なんだ？その貴重なものって！

「じゃあ誰に渡すかを決めますよ」

「先生！どうやって決めるんですか？」

と、聞いてみた、すると先生はこう言った

「え？くじ引きですよ？」

そう言うと同時に先生は何やら怪しげな箱と大きく【くじ引き】と書かれた

箱を机の上に置いた、そして先生はイスの上に立ちくじを引き始めた

「はいいます1人目は・・・」

ゴクリ、と誰かがつばを飲む音が聞こえる

「おつ、1人目は九条沙織さんです」

教室中でおい、誰だ？どの子だ？と沙織さんを探し始める奴がちらほら

「えっ？あたしですか？」

その際、お前すごい物貰ったな、とかいいなー沙織さんとか、まあ改めてコレの凄さが分かったような・・・

「ここが体育館か・・・広いなー凄く広い、1つの町すっぽり埋まるんじゃないか？」

本当に広い、ここでかくれんぼしたら見つからないと思うのは俺だけ？

すると沙織さんがこちらに近づいてきた

「どうしたの？沙織さん」

「えっとね、ちょっと不安だからせめて知り合いの近くへ行こうと思ってる」

「それで俺の近くにいらしたと」

「うん、そういうこと」

おう、なんか知らんが好感度上がったる！

「はい、じゃあその召喚石を握って念じてみてください」

「念じる？」

「はい 出て来い出て来いと念じるのですよ」

俺はその石を強く握り、心の中で出て来い！と叫んでみたでも反応なし、次第にこの石を疑い始めた

「あれ？出てこないよ、秋人君はどう？」

「あー俺も出てこないや」

マジでこれ召喚獣ってのが出てくるのか？

やっぱ偽者なんじゃないか？

しばらく奮闘し続けたがやっぱり出てこなかった

先生にも聞いたが「出てくるはずなんですけどねー」と困り気味に返されてしまった

と、いうわけで俺たちは教室へと戻った、一体何しに来たのやら

「出なかったね〜」

「出なかったな〜」

「今日はこれで放課後に入るんだって、秋人君は何かすることある？」

「俺？いやもうまっすぐ帰ろうかと思ってる」

「ってことは暇なのかな？」

「おう、暇なのかもしれない」

「じゃあさ、ちょっと付き合っつてよ」

「エ？イマナンティツタ？」

「ごめん聞こえなかった、何？」

「ちょっとあたしと付き合っつて、って言ったの」

付き合っつて？

「ダメ？」

「いいよ、いいよ全然おっけー」

「やっぱり今、付き合っつて」って言ったよな

コレっつてもしかして!!!!

そんな勘違いをよそに秋人君は沙織さんと、とある洋菓子店へと行きました

「ここは？洋菓子店？」

「うん、洋菓子店」

「にしても何で俺と？」

「そんなこといいから早く早くー」

「やっぱり俺のことが好きなんじゃ」

俺はそのまま引っ張られるかのごとく店内へ案内させられた
なんかいろいろわけわからない出来事があつたけど

まあこういうことが発生するならいいや

家に帰ると事件が起こった

「ただいまー・・・っていつても一人暮らしなんだよなー」
「はあ・・・彼女とか居たら同居生活できるんだけどなー」

「どうせ俺はもてない男ですよっ」と

と、言いながら俺はベッドへダイブした、そしてケータイを見る

「着信履歴ナシかあ・・・そりゃそうだ買ってすぐだから一体誰が電話を掛けるんだ」

ああとうとう一人でポケとツッコミが成立するようになってしまった
さびしい男にまた一歩近づいたのだ

「ああーあ、彼女ほしいなー、沙織さんとか彼女になってくれないかねー」

・・・あるんじゃないか？ 可能性

だって今日とかあつちから近づいたんだぞ、とりあえず高感度は上がってるだろ

このまま、このままいけば・・・いや、それはないかー

「うんうん、それはないよー」

「だよなーそれはないよなー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

????????????あれ????????????

「ん!?!」

周りを見渡すが誰も居ない・・・え?

「はっ!?!えっ??!何!えっ??!幽霊!?!えっ幽霊!?!」

思わず手を合わせ南無阿弥陀仏と言おうとするが焦って舌がまわらず
なむあみだだづと言ってしまう、そのままずると

「なむあみだだづ!?!なむあみだだづ!?!なむあみだだづ!?!おっ・

・・・!!言えた!?!!!」

と、なんか知らんが妙な達成感が込み上げてきた、とそこへ

「お〜いこつちみるー」の声・・・

「・・・・・・・・まだ居たか!?!くそつどこだ!?!南無阿弥陀仏!南無阿弥陀仏!」

「あたしは幽霊じゃないんだよ」とどこかで声がする
冷静になるう、さっきの声は明らかに男の声では・・・ない
それはつまり、俺の家（1人暮らし）に女の子が転がり込んだ（？）
ってことだろ

考える、考えるんだ、そうなった場合俺はどうすればいいんだ
考えるんだ、冷静になれ

「おい」と聞こえるがそんな声耳にも入らない
考える俺！こついうときは何をするんだ？・・・まさか！！！！
あれか！！！！

「これはもしかして彼女になってあげるからここに居させてーとか
あるいは

あたしと結婚してください！！とかなのか？」

そつだよ・・・これしかないじゃないか！そしてあつちは「違いま
す！人違いでした！」

とか言つてここから出て行つてくれるはずだ

・・・しかしそんな考えも裏腹に・・・

「え？・・・バレた？」との声

エ？ナニ？バレタツテナニ？どつどつしよう・・・

「とつ・・・とりあえず姿を現せてくれないか？」

つてバレタ！彼女になつてくれる？？これつて・・・ラッキー！
！！・・・なのか？

次の瞬間、そいつは姿を現した

「これでいい？ごめんなさい急に出てきてビックリしたよね、えつ
と・・・なんでバレた？」

と、小さな少女が俺の目の前に出てきた

「・・・かわいい」

「えつ？今なんていつたの？えつ今かわいって言ったよね」

と少女が顔を赤くしながらそう言った、こつこれは・・・ラッキー
だ！！

「！！是非付き合ってくれ！！」

「えっほんとにいいの？」

「おう！本当だ、だってこんなかわいい子が俺と付き合いたがってるってんなら

こっちも付き合うしかないだろ」

と、考えに考えたセリフで獲得した情報を元に言ってみた

「えっ本当！？えっと・・・急すぎてこっちがついていけないや」

それはこっちのセリフだと思う・・・うん

「とつとりあえず自己紹介するね、あたしの名前はシルフィ、風の精霊で召喚獣やってます」

「・・・召喚獣？」

「そう、あなた・・・いやごめんなさい・・・秋人が持ってたその石にあたしは居たんだよ」

「あっ・・・」

そういえば召喚石貰ったんだ・・・あれ本物だったんだ
ってこれからどうするんだ？いきなり召喚獣と同居生活なんて言われてもなー

「あっそうだった、ここじゃシルフィって不自然だから秋が名前付けてね〜」

と、こちらを見つめてくる、恐らく「どんな名前だろ？可愛いのつけてくれるといいな」

とか考えてるんだろうか・・・とその前におかしなことが

「えっとその姿だと、外に出なくてもいいんじゃないか？それだったら別に名前は

えっと・・・シルフィのままでもいいんじゃないか・・・」

本当にそうだ、こんなに小さいのであれば話しかけられる、いや見つけられることはないだろう

よって名前なんて要らないんじゃないか？

「えっ？あっそうだった」

今きづいたみたいなのがカンジだなおい

「よいしょつと」

と、目の前の少女は何かを唱えた

「えっ？ちよ．．え？どうなってんの？」

目の前の少女は急激に身長が伸び．．

そしてみるみる俺と同じくらいの身長まで伸びると「よしっ」と言
った

それを言うと同時に異常なほどまでの成長が止まった、なんなんだ
？これ

「これで普通の女の子だよね秋」

ん？アレ？いつの間に俺はアキと呼ばれてるんだ．．それよりコ
レは一体．．

「一体どうなってるんだ？」

いや、待て召喚獣なんだコレくらい出来てもおかしくはないんじゃ
．．つて

もうそうやって受け入れるしかないんじゃないか？

「とつとりあえず名前がほしいんだっけか？」

「うんそうだよー」とうなづき、彼女そのまま歩き出した

「つてどこ行くんだよーそっちには全然使ってないキッチンとほぼ
スツカラカンな

冷蔵庫があるだけだぞー」

「今からあたしが料理するの」

と、少しほっぺをふくらませながらそう言った

ちよつと料理という言葉に思わず期待をしてしまう

そして何より、彼女がとてもキレイでかわいい女の子に成長（？）

したので、若干見とれてしまう．．夢じゃないだろうな

ほっぺをつねって確認してみる．．痛い．．夢じゃない！！

「．．．とりあえず座るか」

と、テーブルに手を置きそこへ座る

トントントントントン、と包丁で何かを切っている音がする

お？もしかして料理は得意なのか？じゃあちよつと期待しとくか

・・・何でこの状況を受け入れてるんだろ？明らかにおかしいはずなんだけど・・・

あーこんなの考えても仕方ない・・・あっそうだ名前考えてあげないと

可愛い名前・・・可愛い名前、えーと柴崎・・・静花・・・花はないか・・・華違いだな

とキッチンを見て思う、あぁー柴崎・・・朱音、彩香、いや・・・綾華？

柴崎綾華・・・おいしい優奈・・・コレか？柴崎優奈・・・なーんかちがうなー

もう一度彼女をしてみる、すると彼女がこっちに視線に気づいたのこちらを見てにこっ、と笑った

それをみてるのと恥ずかしくなってきたのでつい視線をそらした・・・なに照れてんだか

ふと1つの名前が浮かんだ・・・柴崎綾音しばさきあやね・・・いいんじゃないかあやーとか呼んだりして（笑

「おーい、名前考えたぞ〜」
と言ったところ「えっ?!ホント!?!」

と、明らかに嬉しそうな声が聞こえてきた

彼女は夕食を作り終え、お皿をこっちへ持ってきた

そして出来たばかりの夕食をテーブルへおく・・・

「えっ!スゲエぞコレ!美味そうー!」

目の前に出てきたのは麻婆豆腐、完成度高すぎだろ

ってかやばい・・・マジでやばい、なにこれあなたはもしかしてシエフか何か?

「腕によりを掛けてみた」

と自信満々に返事をしてきた

「じゃあ早速食べていいか？ちょっとスプーン貸して・・・ってうわぁー!？」

「ん？どうしたの？」

「どうしたの？じゃなくて今何しようとした?!」

「何って早速食べるんでしょ？だからはいアーン」

「ちょっと待ってくれ！すげえはさかしいんだけど?!」

「え〜？恥ずかしくなーい恥ずかしくなーい」

「こっちすごく恥ずかしい・・・」

いや、まさかこんなに早くあーんしてもらえる時が来るなんてにしても急すぎて逆にドキドキするわ!!

「そっか、やつぱ恥ずかしいか」

と、諦めたのかとりあえずスプーンを戻す綾音（仮）

「うん、恥ずかしい」

「恥ずかしかつたよねごめんね」

「そうだよ、恥ずかし」

「隙あり!!」

「んぐっ!!」

不意打ちだ、くそー不意打ちのスキルがあつたのか

・・・ん？美味い！えっ？すげえ美味い！

「おいしい？」

不安そうにそう聞かれた

「めっちゃ美味い！」

「良かったー久々の料理だったから心配だったよー」

「あつそうなんだ、でもすごいよ」

「これでお嫁さんになれるねっ」

「えっ？お嫁さん？」

「うん、これからずっと生きていくんだよ？これってお嫁さんでしょ？」

「あぁーそういうことか・・・」

つまり、ずっと俺のそばに居るつもりなのか？

じゃあこのままだと俺のお嫁さんは確定してしまう・・・
でも、でも俺には沙織さんがっ!!! (勘違い)
このシナリオはまずい・・・なにか策はないのかっ!!!!!!
考える、考えるんだ、嫁になることさえ阻止すればいいんだ
考える、考えるんだ柴崎秋人!!!
.....あつ

「あのなー嫁になるためには結婚式を挙げないといけないんだよ
さらに、お嫁になるには条件がありまだお前はその条件を満たして
いない」

「えっ!? 条件って?!」

「それは自身で見つけるんだ」

「えええー!!! じゃあまだお嫁になれないんだ」

あら。まずい本気で落ち込んでる・・・

「でも彼女にならなくてもいいぞ」

これでいいのか?

「えっ彼女!? えっと嫁の1ランク下の!?!」

え? 1ランク下? あなたの脳内どうなってるんだ?

「じゃあ私は今から秋の彼女になる!」

おっ元に戻った・・・とりあえずはいいか

「そしていつか秋のお嫁さんになる!」

と綾音(仮)はそう宣言した

そして今日からボクの彼女は召喚獣となりました

召喚獣きました（後書き）

どうでしたか？感想待ってます。

ではこのへんでお相手は柴わんこでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7939j/>

ボクの彼女は召喚獣！？

2010年10月9日01時43分発行